慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 2013年度慶應義塾大学藝文学会シンポジウム : 京劇と日本 : 梅蘭芳を中心に : シンポジウム報告 |
| Sub Title | Symposium : Beijing opera in Japan : with specific reference to Mei Lanfang : symposium report |
| Author | 岡, 晴夫(Oka, Haruo)<br>袁, 英明(Yuan, Yingming)<br>平林, 宣和(Hirabayashi, Norikazu)<br>山下, 輝彦(Yamashita, Teruhiko) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 2014 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.106, (2014. 6) ,p.118 (263)- 128 (253) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 2013年度慶應義塾大学藝文学会シンポジウム : 京劇と日本 : 梅蘭芳を中心に<br>開催日: 2013年12月20日 (金)<br>場所: 慶應義塾大学三田キャンパス東館6-7階 G-SEC Lab |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01060001-0118 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2013年度慶應義塾大学藝文学会シンポジウム

# 京劇と日本

## ── 梅蘭芳を中心に ──

日時：2013年12月20日（金）午後3:00 ～ 6:00

会場：慶應義塾大学三田キャンパス東館6-7階　G-SEC Lab

パネラー：

岡　晴夫　（慶應義塾大学名誉教授／中国古典演劇）

袁　英明　（桜美林大学芸術文化学群演劇専修准教授／中国演劇学／京劇俳優）

平林　宣和（早稲田大学政治経済学術院准教授／中国演劇史）＊司会

山下　輝彦（慶應義塾大学文学部教授／中国語学）

中国文学専攻・山下輝彦教授のご退任記念として、「京劇と日本―梅蘭芳を中心に」というテーマでシンポジウムを開催いたします。

「中国演劇史上の京劇」（岡晴夫先生）、「京劇・梅蘭芳と日本」（袁英明先

袁英明先生実演《天女散花》

生)、「梅蘭芳の古装新戯と大倉喜八郎」(平林宣和先生)、「日本における京劇」(山下輝彦先生)という題でご講演頂き、京劇と日本との関わりについて語り合います。

また、最後に京劇女優でもある袁英明先生に京劇の一節を演じて頂きます。

(以上シンポジウムのちらしより)

ご多忙の中、岡晴夫先生、袁英明先生、平林宣和先生がパネラーとしてシンポジウムにご参加くださった。シンポジウムにおける講演については、先生方にそれぞれ論文のような形でまとめて頂いた。シンポジウムの臨場感を伝えるために私は自分の発言をまとめたほか、先生方とのディスカッションやその後の聴衆との質疑応答についても録音に基づき文字化した。(山下)

平林(司会):早稲田大学の平林です。先ほど『藝文研究』の最新号、山下先生の退職記念号の最初の方に略歴がありまして、その2010年10月のところを見ますと、梅葆玖と市川団十郎の両氏が早稲田で対談をしたのですが、その時に「敵陣」早稲田大学で通訳として孤軍奮闘くださった、という記載がありました。いま拝見して急に思い出しまして、その時のお返し

ではありませんが、「敵陣」早稲田大学からお手伝いに参りました。本日は拙い司会になるかと思いますけれども、どうぞ宜しくお願いいたします。

山下先生といいますと、NHK テレビの中国語講座の講師を担当されたりして、一般的には中国語学、中国語教育の偉い先生として知られていると思います。一方私にとっての山下先生というのは、かれこれ二十数年のお付き合いになるのですが、日本で京劇関係の催しがある、特に票友（ピヤオユウ）、素人さんの京劇の発表会などがあると、必ず楽隊の一人として舞台脇で演奏をされている、つい先日もこちらの袁英明先生、桜美林大学で学生の京劇の公演があったのですが、そこにもやはりいらしていて、二十数年間、京劇の催しがあると必ず楽隊に加わられている先生、という印象が今日まで変わりなく続いております。

今回壇上にいる面々も要するにこうした京劇仲間がずらりと並んでいる、ということなのですが、今日の「京劇と日本」というテーマは、皆で集まった際にごく自然に出てきたもので、それこそ何となく決まったものです。何となくと言ってもきちんと背景がありまして、それは来年（2014年）が、丁度袁英明先生の先生の先生である梅蘭芳の生誕120周年記念であることで、いま中国では色々な記念活動の準備が進んでいるところです。それからさらに5年経つと、1919年、これは梅蘭芳が初めて日本に来て京劇を上演した、実質的に日本人が本格的に京劇に接触する最初の機会となった年なのですが、その百周年の節目となります。いま日中関係については色々とありますけれども、その中で我々日本人と京劇との関わりというのをもう一度改めて考え直してみるのも面白いだろう、という思いがありまして、今回のシンポジウムのテーマとして設定したという次第です。

これから内容が盛りだくさんで時間が足りなくなってしまう可能性がありますので、さっそく各パネリストの発表の方に移りたいと思います。最初に岡先生、次に袁先生、私、山下先生の順番で発表させて頂きます。発表時間は20分、みなさんのお手元にそれぞれ資料がありますので、それをご覧になりつつ、お聞きいただければと思います。

［パネラーが順次発表した。発表内容は論文、報告書という形で本誌に掲載。続いてパネラー４人によるディスカッション］

## 慶應と京劇の関わり

平林：山下先生ありがとうございました。日本での票友の活動について、これまで詳しくお話を聞く機会がなかなか無く、非常に勉強になりました。ちなみに私もお話の中に出てくる東京京劇研究会に以前参加していて、その時の映像か何かが出てきたらどうしようかと、ひやひやしていたのですけれど、幸い出ませんでした。

それではこれからディスカッションに移りたいと思います。話題が多岐に及んでいまして、どこから手をつけたらよいか悩むところなのですけれども、今回は慶應義塾大学でのシンポジウムですので、早稲田の方は梅蘭芳が訪日公演の時に訪れたりして、色々京劇との関わりがあるのですが、慶應大学と京劇との関わりはどのようなものがあったのか。先ほど山下先生の年譜を拝見したら、授業で岡先生と山下先生とが京劇の音楽の一部を演奏されたというような記述がありまして、そのあたり昔話として、教えていただけたらと思いますが、いかがでしょうか。

山下：慶應大学に入学して岡先生の授業を受けることになり、その授業は「中国演劇史」だったように記憶しています。その授業の最後の時だったと思いますが、岡先生が授業の中で、京劇の舞台で皇帝などが登場する時に使う伴奏音楽「小開門」という曲を使うのだと説明されました。丁度その時、私も胡弓を少し習っていましたので、岡先生と二人で、その曲を演奏しました。その時は先生が京胡で、私は京二胡を担当しました。私にとってはたいへんいい思い出になりました。

岡：そんなことがあったのですか。全く覚えていませんが。（観客席　笑）

山下：私ははっきりと覚えています。私が二年生の時で、いまの第一校舎の二階の大教室でした。80人位入る教室でした。

岡：まあ、とにかく、山下君はセミプロでして、楽器はなんでもこなせますし、本当に深い造詣を持っていらっしゃるが、私はもう付け焼刃で、

今日の話もそうですが、いつもそんなことで。学生時代に香港に行く機会がたびたびあって、そちらで京劇の知り合いのグループに入って習うということから興味を持ちました。胡弓、胡琴といいますか、これをやったのはちょっと遊び程度で、長続きしないわけですよ。キーキーキーキー鳴らして、自分でもいやになってやめてしまったわけです。山下君はプロ級の腕前で、定年退職なさってからはそちらのプロとしてもやっていけるのではないかと思います。

## 中国の京劇の流派について

山下：私から一言。中国では京劇の色々な流派があります。ですから、程艶秋の程派、梅蘭芳の梅派と言う主な流派に属する俳優はその伝承者ということで、マスコミなどで取り上げられる場合、〜派の「伝人」（伝承者）という言い方で紹介されます。袁英明先生は梅派の伝承者として、国で承認されています。また、京劇の俳優で博士号をとったのは袁先生が第一号になります。

平林：いまのお話にある国家認定についてですが、梅派の「传人」（伝承者）というのは、弟子入りして、「拝師」（師弟になる儀式）をして、それで、伝承者になるのではなくて、ちゃんと国が認定するということですか。

袁：舞台やその流派のイベントに参加して、京劇界や観客から認められるようになるということです。そこでオフィシャルに認められるわけです。

山下：師匠がお前は伝承者だというだけではだめですね。

袁：そうです。舞台や観客に認められなければだめです。

平林：いま中国の京劇の俳優さんには「国家一級俳優」という具合に、一級とか二級とか、国がレベル分けする制度があります。それに似たような制度が出来たのかな、と誤解したのですが、そういうわけではないですね。

袁：それとは違います。

平林：一方で票友に段位制度ができたということを何かの記事で読んだのですが、太極拳などは日本の柔道などの段位制度を取り入れて、太極拳何段というのを始めたらしいですね。どうもそれと同じように票友にも京

資料1

劇何段という制度を作った、というようなことを何かで読んだ気がするのですが、どなたかご存知ないですか。

袁：ええ？　そうなんですか。

平林：面白いなあと思いました。

山下：ただ、胡弓については、級を決める試験があり、確か8か9級まであると思います。その教本も出ています（資料1）。私のレベルは多分下から2番目位ですので、試験を受けていません。

平林：それは京胡についての試験ですか。検定試験ですね。

山下：そうです。検定試験です。

平林：我々が中国語検定試験を受けるようなものですね。

山下：そうです。

平林：それの歌版というのはないですね。

山下：そうですね。なぜ教本が必要かというと、演奏法が色々あるので、試験となると、統一する必要があるでしょう。有名な演奏者が集まって、これが標準的な演奏法だと決めて、基準となる教本を出して、これに従って試験を受けてくださいということですね。

## 袁英明先生と中国戯曲学院

岡：中国の戯曲学院、北京にあって、京劇のプロを養成する大学で、これはもう最高権威の大学です。私も一週間ほど招かれて、講演したことがあります。それ以前、袁英明さんがまだ戯曲学院の学生だった時に学会があって……

袁：1987年だったと思います。その時は国際戯曲シンポジウムがありました。

岡：そうです。これが第一回目でした。全世界から専門家が集まりま

した。私は日本の代表として参加しまして、その時に学生さんが演技して見せるというので、バスをチャーターして朝早く見にいった覚えがあります。その時はすでにトップの優秀な俳優さんでしたから主役を務めておられました。その時の演目は何でしたか。

袁：《天女散花》でした。

岡：私もよく覚えています。戯曲学院ではどのような勉強をなさったんですか。楽器演奏などとは違いますよね。

袁：伴奏は別な学科で、私がいたのは「表演系」つまり、「演技学部」でした。もっぱら演技ばっかり、朝から晩まで演技の練習です。もちろん、普通の授業もありますが、カリキュラムとしては、三分の二以上は専門的な科目です。文学とか、英語とかがありまして、数学はなかったですね。舞台では使いませんので。そういう授業はありません。

大学に入ってから多少自由になりましたが、その前、子供の時、10 ～ 11歳からそのような学校に入っていまして、寄宿制で、その時は毎日5時か5時半に起きて、訓練を受けます。夜、夕御飯の後は自主練習があって、自主練といっても先生がいらっしゃいます。手抜きはできません。毎日でした。大学に入ってから毎朝必ず発声練習がありました。発声練習と歩き方など基本技の練習です。このような基本的な技について毎朝5時半に先生も来て練習しました。朝ご飯の後、午前中はだいたい専門の授業です。午後は一般科目の授業もあります。夜はまた自主練です。朝の訓練は本当に辛かったです。特に冬、その当時暖房がありませんでしたので、まだ子供だった私にはたいへんでした。京劇俳優の養成が子供の時、つまり、10 ～ 11歳の時でなければならないのは、やはり、子供の骨がまだ柔らかいうちに練習しなければならないからです。いくら子供でも足はかなり上げられ非常にきつかったです。腰の柔軟度の訓練では足のかかとのところまで付かなければならず、辛かったのですが、この基礎が非常に大事です。

平林：梅派の役者さんになられてからどのくらい経っていますか。

袁：京劇の専門学校に入ってからは、基礎的な勉強をしました。基礎というのは、だいたい王派です。王派というのは王瑤卿の流派です。この方

は梅蘭芳の先生でもあります。王派は一番癖がないです。専門学校の段階ではまだ流派は分けられません。専門学校では梅派も勉強しますが、その人はずっと梅派とか張（君秋）派とか、限定されません。大学に入ってこの学生が梅派の素質があるなあ、向いているなあと、先生方に思われたら、多めに梅派の演目を習わせます。また、卒業して、自分も梅派に興味があって、向いていると思ったら、さらに梅派の演目、演技を勉強して、それで梅（葆玖＝梅蘭芳の子息）先生のところに行って、弟子入りを申し出ますが、しかし、すぐには認められませんね。梅先生はよく学生が努力しているかどうか舞台をご覧になって、本当に梅派の伝承者として、いいかどうか。私の場合、ずっと二三年先生が私の舞台を見ていました。その上劇団を通じて私の性格や人間性までチェックされました。それでやっと弟子入りになったわけです。

岡：新中国になってから、プロ養成の専門学校のようなものが出来て、今おっしゃったような合理的な練習になり、体罰などはありませんでしたでしょうね。

袁：それはありませんでした。

岡：「さらばわが愛――覇王別姫」という映画がございましたね。だいたいあの映画を見たために京劇が好きになったという人は非常に多いようですね。

袁：この会場にもたくさんおられます。

岡：袁英明さんのお弟子さんたちはお若いですが、その映画はご存知でしょうね。昔は「科班（コーバン）」（劇座）といわれる所で徹底して打ちのめすようにしてプロを養成していた。それが、旧中国のやり方だったんです。新中国になってから一変して、袁英明さんは非常に苦しいこともあったでしょうけれども、「科班」とは全く違いますでしょう。

袁：映画とは違いますね。

岡：今日いらしている方、京劇に興味のある方はみんなあの映画をご覧になったことでしょう。あの映画はたいへんな影響力を持ちましたね。

平林：このシンポジウムは元々何か結論を出すようなものではなく、またそれぞれの先生のお話を聞いているのも楽しいのですが、壇上の話はひ

とまずこのくらいにして、そろそろ質疑応答に移りたいと思います。どのようなことでもご質問があればご自由にご発言ください。

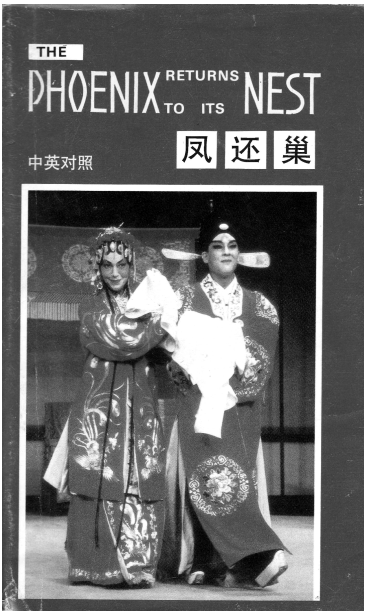
［会場からの質問に答える］

質問：京劇ということばはどのように出てきたものでしょうか。その意味があるでしょうか。「京劇」ということば自体についてお聞きしたい。

平林：演劇史の中で、私の知っている範囲では、北京で生まれたことばではないですね。19世紀後半になると、北京の劇が南の方に、元々南の芝居が北京に来て北京化したものが京劇になったのですが、それが南に逆輸入されたわけですね。その中で、1870年代頃に上海で、「ああ、あれは北京の演劇だぞ。うちとは違うぞ」ということで、「京劇」と呼ぶようになったらしい。上海で19世紀後半にできたことばだ、というのが演劇史の認識です。

質問：山下先生はハワイ大学演劇学部の京劇公演に参加されたそうですが、あちらの京劇はどのようなものなんですか。

山下：ハワイ大学演劇学部はアジアの演劇を選択科目として学生に履修させています。アジア演劇の Elizabeth Wichmann-Walczak 教授は著名な京劇研究者で、かつて中国江蘇省京劇院に留学して、京劇を学び、梅蘭芳の「貴妃酔酒」を習い、舞台で演じました。登場人物は楊貴妃ですが、Wichmann-Walczak 女史は中国では、楊貴妃の中国語の発音が同じことから「洋貴妃」と呼ばれるほど有名な方です。ハワイ大学では、演劇学部が全校から京劇の授業を選択科目として取る学生を募って約半年間掛けて授業で学んだ京劇を2月頃、キャンパスにあるケネディーシアターという劇場で公演を行います。詳しいことは知りませんが、他にもインドネシアの演劇、日本の能、歌舞伎などアジアの演劇を交合にやりますので、京劇公演は何年かに一回になります。ハワイ大学の京劇を一躍に有名にしたのは、「鳳還巣」という京劇です（資料2、3）。これはハワイで公演した後、中国本土でも公演を行いました。青い目の学生達が英語で演じる京劇を




資料2
ハワイ大学京劇公演《鳳還巣》
《THE PHOENIX RETURNS TO ITS NEST》NEW WORLD PRESS BEIJIN, CHINA First Edition 1986

中国国内で上演したのは恐らく初めてだったでしょう。私が参加した時は、「玉堂春」という演目でした。中国国内ではこの演目は、ふつう「嫖院」「女起解」「三堂会审」などいくつかの段ものにして演じますが、それでは、全体を通してのあらすじを知らない外国人にはわかりにくいので、ハワイ大学の京劇では、そのような段ものを全部まとめて2時間の演目にして上演します。そのため内容的にタブっている部分や長い歌を思いっきり省略したりしています。学生の指導は中国の国家京劇院や省クラスの京劇院から一流の俳優と楽師を数か月招いて行っています。舞台ではセリフも歌の歌詞もすべて英語です。（ビデオをみせる）

質問：袁英明先生にお聞き致します。長い間梅派を歌っていると、後で程派の歌い方をしようとした時にできなくなるのですか。

袁：私たち梅派の俳優は梅派を学び始めましたらまずもっぱら梅派の方に専念して、勉強しますけれども、先生からは梅派を勉強したからには他の流派を勉強してはいけないということは一切言われないです。むしろ広くほかの流派のいいところを吸収するようにと先生は仰います。つまり広く勉強してくださいということを教えてくださっています。ただ、私自身梅派を勉強してからまだ梅派を上手にできていないと思っています。

［袁英明先生が《貴妃酔酒》《天女散花》の一部を実演］

資料3
資料2 P.9,P.85

第　一　场

八喽兵引刘鲁七上。

刘鲁七　（念）自幼生来胆气刚，练就拳棒与刀枪

结交绿林英雄汉，桃花山上自为王。

某，刘鲁七。自幼练就全身武艺，来到这桃花山上自立为王，倒也逍遥自在。这几日闲暇无事，不免扮做相士模样，一来游山玩景，二来山寨粮草不足，再看看可有什么好买卖。——一喽罗的！

众　　有！

刘鲁七　听爷分咐（唱“西皮摇板”）

（落幕）

山寨之事多谨慎。

游山观景走一程。

八喽兵、刘鲁七分下。

SCENE 1

The bandit fort on Peach Blossom Peak, early on a spring morning, ca. 1512.

*Four bandits enter from upstage right, followed by Liu Luqi. They pose downstage; all then move upstage, and Liu stands on the table.*

LIU: (*recites*)

From my birth I have been brave, trained in fist, sword, knife, and stave; greenwood heroes are my mates — at Peach Blossom Peak, I'm head of state.

I am Liu Luqi! Well trained in all the martial arts, I came to Peach Blossom Peak, made my-self king, and have been free. Having no press-ing affairs, I will dress myself as a fortune-teller and descend the mountain. Our provisions are currently low — while enjoying the scenery, I can also hunt up a little "business." Soldiers!

BANDITS: Sir!

LIU: Hear and obey!

(*sings yaoban*)

Care for our fort, matters small and great;

*Liu and Bandits move downstage; inner curtain closes.*

LIU: (*still singing*)

I will seek ill gotton wealth to liberate.

*Liu and Bandits exit stage left; inner curtain opens.*